



Title	『環湖帖』の旅を訪ねる
Author(s)	湯城, 吉信
Citation	懷徳堂研究. 2011, 2, p. 15-39
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24661
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『環湖帖』の旅を訪ねる

湯 城 吉 信

はじめに

大阪府立中之島図書館には、懷徳堂関係者の琵琶湖行を題材にした画帖『環湖帖』が貴重書として保存されている。縦二六cm、横三四cmの立派に装丁された折り本である。同画帖では、琵琶湖の名所十一地点を取り上げ、岩崎象外の画に中井竹山・履軒、加藤景範の漢詩、和歌がつけられている。序文（履軒漢文）や跋文（景範和文）によれば、安永九年（一七八〇）夏に船で琵琶湖を一周し、帰阪後、旅行を回顧すべく画家の象外に画を請い、竹山、履軒が漢詩を、景範が和歌を添えたという（成書は天明八年（一七八八））。履軒は俗人が知らない場所を取り上げた^注と自負する。それでは、『環湖帖』はどのような場所を取り上げてい

るのであろうか。筆者は、二〇一〇年八月二十九日、三〇日、九月二十九日、三〇日の四日間、『環湖帖』が取り上げる十一地点を訪ねた。本稿はその現地調査報告である。画に附された詩歌も附記する。

（注）序文冒頭「環湖皆山也、其尤幽邃奇絶者世多不之識。而其所伝称者、非官道所由即愚民賽禱所歷、往々非其至也者。」

『環湖帖』が取り上げる十一地点

以下、『環湖帖』が取り上げる十一地点について、『環湖帖』の画を挙げ、現地の現在の様子を述べていきたい。地点は天津から時計回りに並んでいる。実際に訪れた順番であろうと思われる。

一、園城寺（三井寺）^{おんじょうじ} 観音堂 附：竹山詩

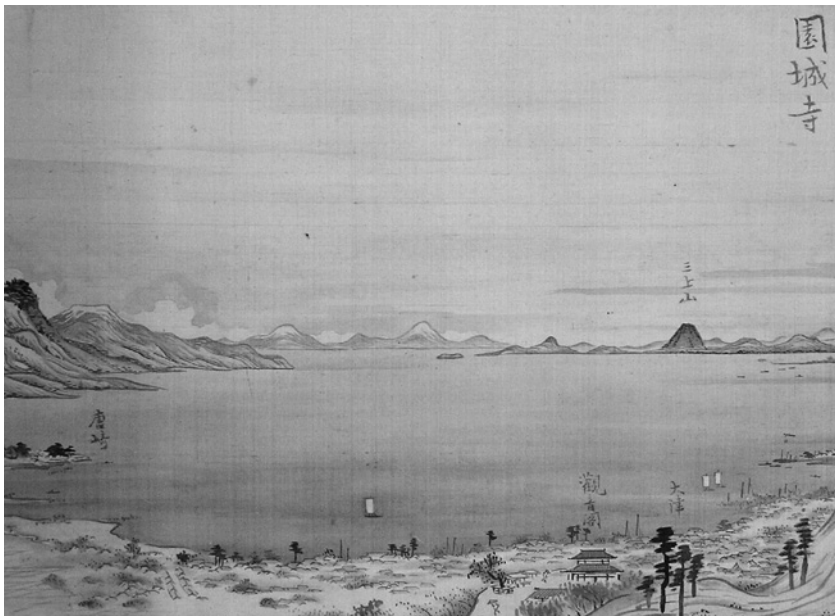
画は、観音堂の後方より、対岸の三上山（近江富士）や唐崎、それに琵琶湖西岸を鳥瞰した構図になっている（画1）。

現在、三上山、唐崎、琵琶湖西岸はいずれも観音堂附近から確認できる。ただし、三上山は、現在の観音堂からはマンションに隠れて見えず、観音堂から一段上がった丘（『近江名所図会』の画によると、天神があつた場所）からわずかに見えるばかりである（写真1）。（三井寺の北にある大津市歴史博物館からはきれいに見える。）唐崎は写真2のように見え、琵琶湖西岸はそのさらに西に目をやつてようやく視界に入る。

つまり、『環湖帖』の画の構図は、実景を一幅に縮めたものと言える。なお、大津市歴史博物館に展示されていた明治期の写真によると、明治期の観音堂附近は今ほど樹木が繁茂しておらず眺望が開けている。江戸時代もそのようであつたかもしれない。

高閣大悲像 俯闚平地科 千手掬銀漢 瀉為万頃波

竹山 *大悲は観音。



画1 園城寺（三井寺）（字：観音閣 大津、唐崎、三上山）

写真1 観音堂上からの眺望（右上に三上山が見える）



写真2 同上（湖岸から突き出した部分が唐崎）



二、真野^{まの}浦

附…景範歌

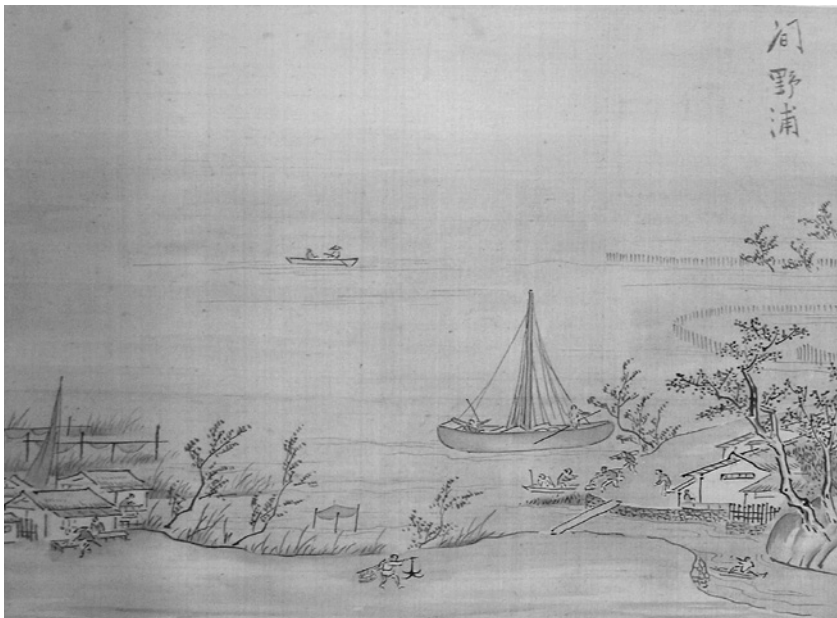
真野は現在、琵琶湖大橋のすぐ北に位置する（写真3）。附近には葦原が残り、往時を髣髴とさせてくれる。画（画2）に近い構図で写真を撮ることもできた（写真4）。ただ、近年オープンした大型ショッピングモールが対岸を占拠しているのが目障りである。

『環湖帖』がここを取り上げるのは何より歌枕であるからであろう。画には、『金葉和歌集』の「うづらなく真野の入江の浜風に尾花波よる秋の夕暮れ」を踏まえた景範の和歌が添えられている。

こむあきの おばなかなみも おもかげに

なつくさなびく まのうらかぜ

景範



画2 真野浦（間野浦）

写真3
道の駅から琵琶湖大橋を望む



写真4
今も残る真野の葦原



三、楊梅の滝（布引の滝）

附：竹山詩

画では、滝への道と山肌から姿を見せる滝の様子が描かれて（画3）。現在、小松駅をやや登った場所に「楊梅滝道」の道標（昭和初期建立）があり、その辺りから見る景色は画を彷彿とさせてくれる（写真5）。ただ、滝を望むことはできず、山並みも画とは違う。

画にやや近い滝の様子は現在の滝見台から望むことができる（写真6）。楊梅の滝は、標高一〇〇メートル以上位置し、現在も梯子を伝って急な山道を登らないと行けない。画にあるのは雄滝で落差は四〇メートルほどある。個人的な話だが、筆者は以前、真夏に比良山に登り、比良山から小松に下りた際、この滝の涼しさに救われたことがある。

小松駅端山
瀑懸布幾匹
来往綺純子
看取天公質
竹山



画3 比良山楊梅滝（字：比良嶽、布瀑）

写真5

楊梅の滝への道



写真6

滝見台から望む楊梅の滝（雄滝）



（注：二十二頁） 小林博「湖岸景観の保全」（琵琶湖研究所ニュー

ス『オウミア』二五号、滋賀県琵琶湖研究所）による。同論

考は、この開鑿で海津大崎の岩礁が身近になったというが、
そのために湖南からより身近にあった岩礁が破壊されたこと
は忘れてはならないであろう。

四、よらいわ 鎧岩

附：景範歌

画では、湖に突き出した岩が描かれている(画4)が、現在は完全になくなっている。十一地点の中で古今の変化がもっとも大きい場所であると言える。小松の北、白髭神社の南の、丘が湖に突き出した地点である。現在は場所を示す表示も一切なく、車では通り過ぎてしまう。

『近江名所図会』(一八一五年)や『近江輿地誌略』(一七三四年)によると、ここは、岩の形と色が鎧のようであったことから鎧岩と呼ばれた。落石も多く、交通の大きな障害になっていた。今も写真7のすぐ左横には、落石からの安全を祈る岩除地藏がある。この鎧岩は明治一四年に開鑿され道が造られた。(注三十四)道の改良は平成になつてからも行われ、現在、国道一六一号線は写真7のようにまっすぐになり、その下の湖岸も写真8のように単調な姿を呈している。

同地は、『近江名所図会』や『近江輿地誌略』にも画が見えない。『環湖帖』の画は実景そのままではないだろうが、歴史上貴重なものであると言えよう。

かもめたつ いそのしらなみ 岩根松

海みやられぬ きしつたひかな

景範



画4 鎧岩

写真7 鎧岩を開削してきた国道一六一号線



写真8 同上国道下の湖岸



五、白髭神社しろひげ 附：履軒詩

白髭神社は、湖に鳥居があり（写真10）、近江の厳島とも呼ばれる。画は、神社の上から境内と湖を俯瞰した構図になっている（画5）。現在も絵に描かれた本殿、一段上の内宮・外宮ともに現存し、画が実景に近いものであることを確認できる（写真9）。ただし、この画では悠然と船をこぐ翁の姿が描かれているが、現在では水上バイクが爆音をあげ（写真10）、湖岸沿いの国道一六一号線もひっきりなしに車が通っていた。

『環湖帖』がここを取り上げるのは、白髭神社を称えるためではなく、湖の幽邃さを愛でるためである。履軒は、「神主（赭背香火侶）は祭神猿田彦を蔑むか」はこの景色を愛でることはできない。湖で魚を釣る翁を訪ね桑海の変を語りたい」と神道への侮蔑を露わにしている。祭神の猿田彦が数百年生きて湖が草原となるのを数回目にしたという神社の縁起（『近江輿地誌略』巻三十）を皮肉っているのである。

赭背香火侶
那堪談賞心
湖上尋釣翁
欲訪桑田変
履軒



画5 白髭神社（白髭祠）

写真9

内宮より本殿を望む



写真10

白髭神社鳥居（水上バイクが見える）



六、海津^{かいづ}

附…景範歌

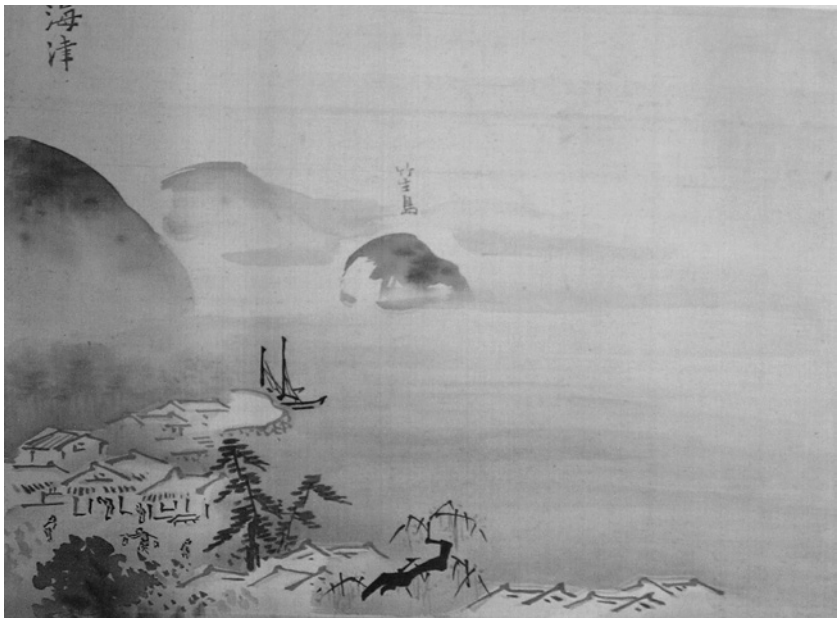
画では、海津の集落と竹生島が描かれている（画6）。現在、海津は湖岸、集落ともに往年を思わせる落ち着いたたたずまいを見せている（写真11）。ただ、竹生島が画のようににはつきりと見えるのは海津の町から数百メートル南に行った辺りからである（写真12）。画は実景を縮めて一幅に収めたものだと言える。

なお、この画の左にせり出した部分が海津大崎で、今はその岩礁と桜並木で知られ、琵琶湖八景にも選ばれている。

おぼつかない こよひかいつに やどとれで

くるるうらは（浦わ）を あすにぞはみめ

景範



画6 海津（字…竹生島）

写真
11

海津の集落

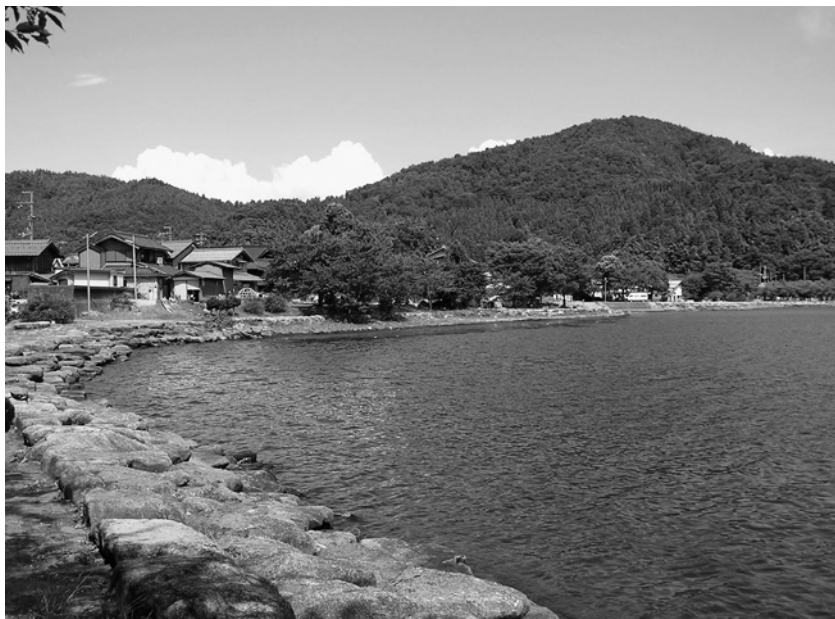


写真
12

海津南より竹生島を望む



七、賤ヶ岳しずがたけ（余呉湖よごこ）

附・履軒詩

画には「志津嶽（＝賤ヶ岳）」と「余吾湖＝余呉湖」の文字が見え、余呉湖の北から南に賤ヶ岳を望む構図になっていることがわかる（画7）。現在、同様の角度で眺めると写真13のようであり（山並みの左半分ではいちはん高い部分が賤ヶ岳山頂）、山並みは画ほど起伏がない。山並みはむしろ余呉湖から北の景色に近いとも言えそう（写真14）が、要するに画は賤ヶ岳を強調したデフォルメなのであろう。また、左右の幅も実景よりも縮まっている。

一行がはるばる余呉湖の北まで足を運んだかどうかは定かではない。履軒の詩（七本鎗を称える）を見ればわかるように、この場所を取り上げたのは賤ヶ岳の戦いの舞台だったからであり、歴史に重点を置く選定であると言えよう。

湖水変血後
七戟雁行蹟
風急暮雲黒
叱咤在耳目

履軒



画7 賤ヶ岳（志津嶽）（字・余吾湖）

写真13

余呉湖北より賤ヶ岳を望む



写真14

余呉湖南より北を望む



八、伊吹山 附：景範歌

画では、山頂手前が尾根となり盛り上がった伊吹山と麓の水郷の様子とが描かれている（画8）。この山容は西からの実景に近く、その偉容は今も対岸の高島付近からも望むことができる（写真15）。ただし、現在、盛り上がった部分は石灰採掘のため削られ、痛々しい岩肌が露わになっている（伊吹山南の米原からは直線状に抉られた山容が見える）。この石灰採掘は今後も続けられ何百年か後には山腹まで掘り進むという。湖東の名山は全くその姿を変えてしまうのであろうか。なお、伊吹山は琵琶湖からは離れている。画の水郷の様子は実際にはさらに南の湖岸部でなければ望めないと思われる。

なお、この画に付けられた二首の和歌（景範作）の中、前者は『後拾遺集』の「かくとだに えやはいぶきのさしも草 さしも知らじな 燃ゆる思ひを」を踏まえる。

さみだれの はれまながらに いぶきやま

もゆてふ草は 猶しげりつつ 景範

あめ晴て まさるみかさに くがみちの

木々の陰ゆく にほのうらふね 景範



画8 伊吹山 (伊福山)

写真15

対岸の高島付近より伊吹山を望む



九、彦根

附：竹山詩

彦根城は明治期に解体の危機を免れ現在に残る名城である。画はその彦根城を南東から望む構図となっている（画9）。画は城下町と琵琶湖の位置は実際通りだが、天守閣の様子は実景と違う。実際の天守閣は三層構造で、向きもこの画から右に九〇度ほど回した方を向く。また、三井寺同様、実際にこのように見える地点は存在しない（視点は上空にある）。画に近い視点を求めると、訪問当時（八月）特別公開されていた佐和口多聞櫓内の展示模様の写真を提供するしかなかった（写真16）。

なお、この画には、井伊氏二代の治世を称える竹山の詩が添えられている。賤ヶ岳と同じく、歴史に重点がある選定であると言える。

両世攀龍業
同兼将相資
金亀城郭壯
自樹万年基

竹山



画9 彦根城

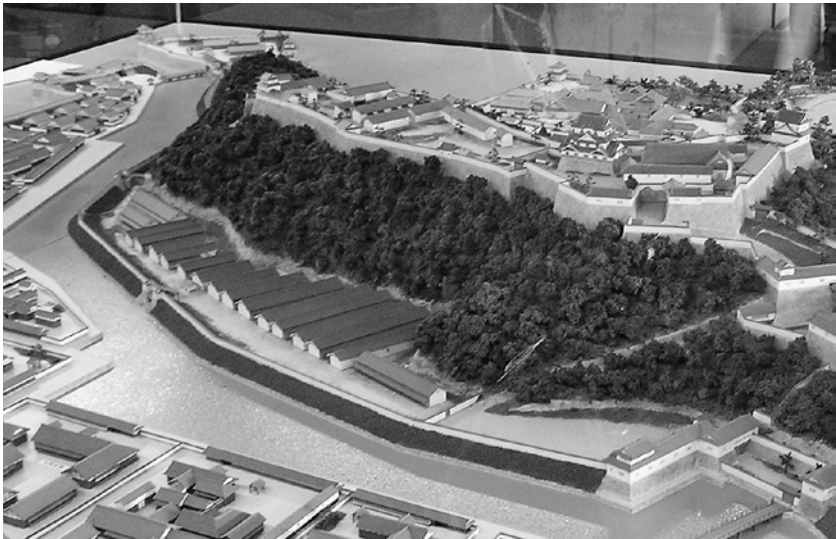


写真16 彦根城模型

十、安土山惣見寺（總見寺）

附：景範歌

画では、山腹に建つ惣見寺の建築群とその下に広がる湖（小中の湖）が描かれている（画10）。明治二六年の地形図（写真17）を見ればわかるように、安土山は琵琶湖の内湖に突き出した要衝の地にあり、絶景を誇った（写真18）。だが、太平洋戦争中から始まった干拓により多くの内湖と複雑な湖岸が失われ（写真19）、現在、安土山の周りは陸地になっている。

また、惣見寺も二王門と三重の塔以外は江戸末期に焼失した。『近江名所図会』に見える惣見寺の伽藍（写真20）を見ると、『環湖帖』の建物がほぼ実際通り描かれているのを確認できるが、清水の舞台のようにせり出した眺望閣はなく、実際には庫裏だったようだ。画は眺望を強調するあまりのデフォルメであろう。ただ、険しい石段（写真21）を登り、惣見寺跡から眼下を見渡すと、今も干拓を免れた西の湖が望め、往時をしのぶことができた（写真22）。

（注）太平洋戦争中、食糧増産を図り、干拓が始められた。この干拓には全国各地から多くの中学生が動員された他、アメリカの捕虜も働かされたという。

山寺の くにをつくして 見わたせば

かぎりありけり 嶋の海つら
くだらむとすれば なごりそふ

なみまの空に みか月の影

景範

景範



画10 安土山惣見寺（字：円通閣）

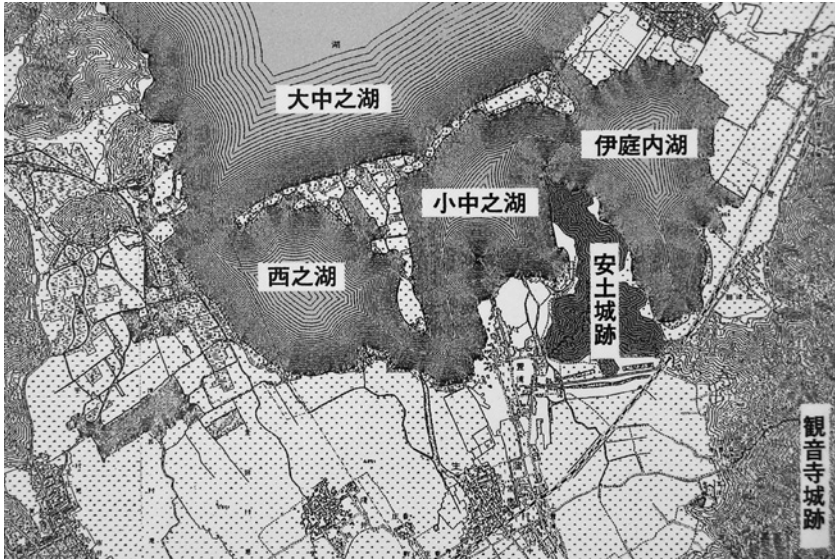


写真17 明治25年の内湖の様子（安土城跡案内板）



写真18 南東から望む安土山
（左から二つめの頂が摠見寺跡地、二つめの高い頂が安土城跡）

写真19 現在の安土山附近（安土城跡案内板）



写真20 『近江名所図会』に見える摺見寺



写真21 惣見寺二王門へ向かう石段



写真22 惣見寺跡から眼下を望む

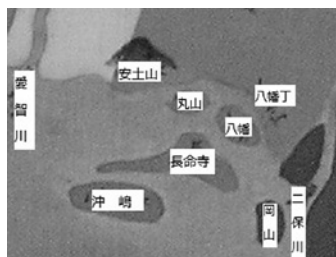
十一、長命寺

附：履軒詩

安土山の西に長命寺山があり、琵琶湖にせり出している(写真23)。画では、琵琶湖に望む山の中腹に長命寺の三重の塔が描かれ(これも山並みは実際とかなり違う)、湿原から長命寺へと続く道が綿々と描かれている(画11)。以前はこの長命寺山の南部・東部ともに湿地や内湖であった。(『環湖帖』冒頭の地図では内湖というより、陸地が島のように描かれている(画12)。)

画や履軒の詩で強調されているのは、長命寺自体ではなくそこ(仙境)へ至るアプローチである。現在、長命寺川河口付近の葦の様子が往時をややしのばせてくれる程度である。ここでは、今に残る唯一の内湖西の湖の風景を挙げ、当時の湿原の様子を想像していただくことにする(写真24)。

菰蒲出水短
暮鐘隔岫声
徐徐經橋門
漸々入佳境
履軒



画12 『環湖帖』冒頭地図
(拡大、地名表記原画通り)

画11
長命寺

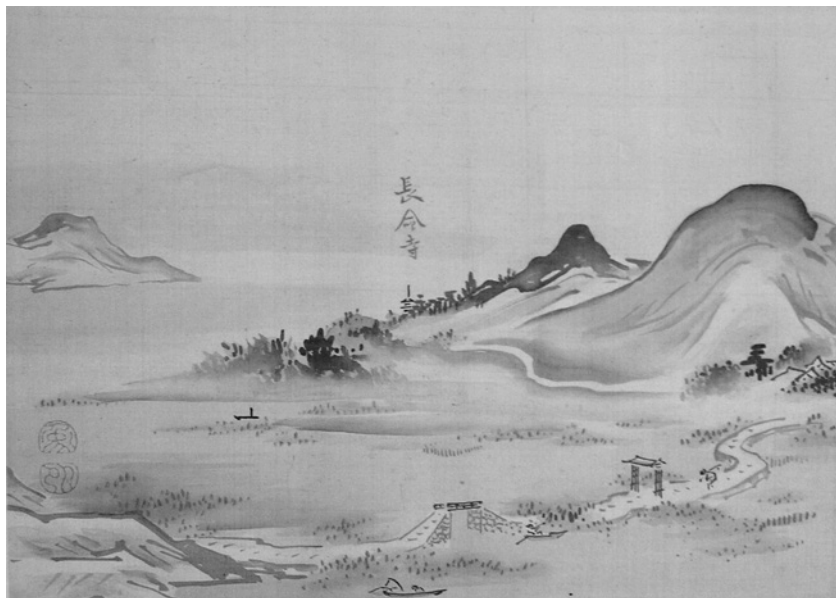




写真23 南より長命寺山を望む



写真24 現在の西の湖

おわりに

本稿では、『環湖帖』の取り上げる十一地点の現況を確認し、原画の構成を分析した。

『環湖帖』の画はおおむね写生的であると言える。ただ、帰阪後に描かれたため、山並みは実景と一致せず、また、一枚の写真には収まり切らない景色を一枚に収めている点、視点が空中に置かれている点において実際と合わない。

『環湖帖』で特筆すべき点は二点ある。

一つは、近江八景、琵琶湖八景との異同である。『環湖帖』の取り上げる十一地点は琵琶湖全域に分布しており、市井からかけ離れた風景を愛でるものが多くを占めている。西国三十三所札所に含まれる寺院（園城寺、長命寺）や神社も取り上げるが、建物ではなく景色に重点がある。また、歌枕や歴史的舞台も取り上げている。近江八景の選定が湖南に偏り、季節や建造物を強調するのとは、場所の選定、モチーフにおいて大きな違いがある。琵琶湖全域に分布している点では、戦後、琵琶湖観光促進のために選定された琵琶湖八景に近いが、仙境を求めた『環湖帖』と観光開発をめざした琵琶湖八景とはモ

チーフが自ずと異なる。琵琶湖を巡る文化史上、『環湖帖』の地点の選定は特筆すべきものであると言えよう。

もう一つは、『環湖帖』が琵琶湖の失われた風景を留めている点である。鎧岩は道路のために開鑿され今は完全に消失した。また、摠見寺や長命寺周辺の内湖も失われた。伊吹山は今も削られている。琵琶湖の多様な魅力（変化に富んだ地形、景観、生物）が失われた点は残念に思う。

本稿では、紙幅の都合から写真が十分に載せられず、附された詩歌の解説もできなかった。近江八景や琵琶湖八景との違いの分析を含め、稿を改めたい。

（本稿は、平成二十二―二十四年度科学研究費補助金・基盤研究C「江戸期の漢文遊記の研究―懷徳堂を中心に」〔研究代表者：湯城吉信〕による研究成果の一部である。）